

# 保安大学の思い出 と記念碑

大東 信祐 陸自57

防衛大学校は今年3月、第62期生を卒業させ、4月に第66期生を迎え入れた。ということは、創立以来、60余年を経過したことになり、それは既に終戦時の在校生が61期であった陸軍士官学校の歴史を超えている。

さらに、防衛大学校（以下、防大）の創設には、保安大学校というわずか2年に過ぎないものの、前史があった。大戦が終わって世の中の仕組みが定まらない時期、見逃されることが多い。

我々「防大1期生」は、多くの受験者から選ばれ、昭和28年4月8日に保安大学校に入校した。だから「保安大1期生」でもある。

当時は、久里浜駐屯地の一角に学校本部と教室があり平作川右岸の飛び地に木造2階建て、旧海軍の兵舎を改装した学生舎に起居し、2年間を過ごし語れるのは、1期生と2期生だけである。

歴史を風化・消滅させないためには、語り継いで文字に残すこと、物的な証となる「碑」を設けることだろう。

1期生はバイオニアと言われるが、今となつては歴史を残す責務も負っていると考えられるようになった。70年も前の話だが、個人的な記憶をたどり、紹介してみよう。

## 1 激動下の開校準備

昭和25年（1950年）、朝鮮動乱が勃発し、マッカーサー書簡に基づくいわゆるポツダム政令により、警察予備隊が創設された。昭和27年（1952年）、対日平和条約の発効に伴い「保安庁法」が制定されて「保安大学校」の設置が決まり、横智雄先生が初代校長として発令された。

保安庁法にもとづき、越中島（旧高等商船学校）にあった保安庁内に「保安大学校準備室」が設けられ、諸準備が進められた。

さしあたっては、久里浜駐屯地を仮の学校地として使用することになり、昭和28年（1953年）4月1日、「保安大学校」が開校した。

昭和29年「保安隊」が「自衛隊」へ改編され、直接侵略対処の任務が示され、現在に至っている。

この間、「再軍備の是非」について国会等で熱い議論が続けられたが、結果的に当時の吉田首相の「再軍備は致しません」、「自衛隊は軍隊ではありません」との国会における答弁が、その

陸士や海兵色を一掃  
卒業すれば学士さま

## 当時の新聞



後の国防組織の方向を定める準拠になったように思われる。

## 2 保安大の「1期生」

### ● 受験・入校の動機

保安大の創設について、当時の世論は大きく揺れていた。端的に言えば「警察か軍隊か」と言うことだ。だから、保安大の受験者にとって、その動機には幅があった。警察予備隊、即ち警察の延長と考える者、士官学校の復活と考える者、手当がもらえ授業料のいらぬ国立大学に価値を置く者等々、様々だった。

『自衛隊十年史』には、保安大入校者の競争率は28倍と書かれている。しかし応募者は、一般の受験者（高卒者）の他にも、保安隊内での有資格者が大量に受験していた。いわゆる部内出身者であり、2等保安士補、今で言えば2等陸曹に相当する者まで、全国で多数受験した。また、受験資格年齢も部隊からの応募者は18〜23歳まで幅があったと記憶しており、受験者の数が膨れ上がったと思う。

### ●学生舎と起居

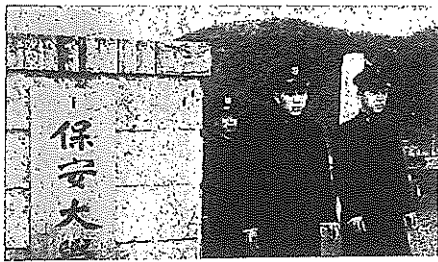
入校を許された我々1期生400名は、久里浜駐屯地の西側、平作川の稜威橋を渡った対岸の飛び地、旧海軍の工作学校の一部を学生舎（居住地域）としてあてがわれた。

学生舎は木造の2階建てで、中央の入り口の左右に1・2階とも大部屋があり、この四つの大部屋がそれぞれ学生100名（1コ中隊）の寢室・自習室として改装されていた。この1年当時の大部屋生活が「1期生の団結」を支える基礎となったのである。

個人に貸与された武器は、米国製のM1ライフルで、久里浜駐屯地の武器庫に集中保管され、野営以外の日常訓練は久里浜部隊の営庭で行われた。

浴場と食堂は、学生舎地区に設けられ、学生専用とされた。教場は、久里

浜駐屯地の一番奥、北側にある木造の建物があてられた。そのため昼食時は、駐屯地の奥から正門を通り、学生舎地区の食堂に行くことになり、小隊ごとに隊列を組んで久里浜駐屯地の営門を通過した。



翌年（29年4月）、2期生が入校してきたため、第2大隊の学生舎は駐屯地の一部の建物を活用させてもらった。居室の編成は、1年生と2年生の混合とされた。「対番」制度が採られ、我々は新しい作業員を得たとして、大いに歓迎したものだ。

教育カリキュラムは、理工科系の国立大学のカリキュラムを基本とし、陸士・海兵の訓練を参考に、新しい士官学校を目指すように立案されていた。

当時、久里浜駐屯地には、通信学校の他に、総隊学校（後の幹部学校）や衛生学校が所在して手狭なため、新しい学校用地が模索され、建設準備が始まっていた。したがって、学校職員も学生も「久里浜は仮住まい」という認識で一致していた。

### ●久里浜での生活・訓練

今も同じだと聞くが、1学年時は陸上・海上要員の区分はなく、2年になって陸・海の要員が指定された。この陸海要員の混合の教育方式こそが、旧陸・海軍協同の失敗を繰り返さないための施策として重視され、建学の理念の一つになっていた。

そのため、1学年の時は共通訓練、2学年になって海上要員約100名が誕生した。彼らは、防衛学で海軍の何たるかを学び、海上実習で横須賀基地

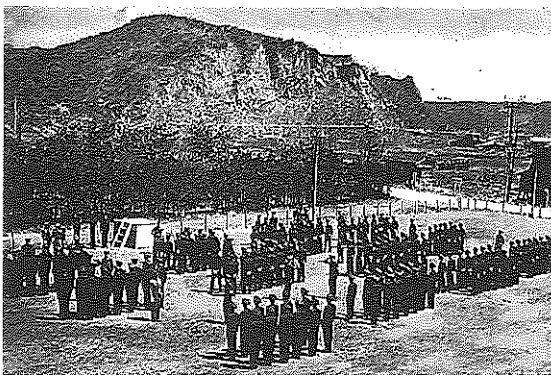
等に出かけ、乗艦訓練で実地を学んでいた。

陸上要員の定期訓練を富士演習場で行うことは、この時から始まった。

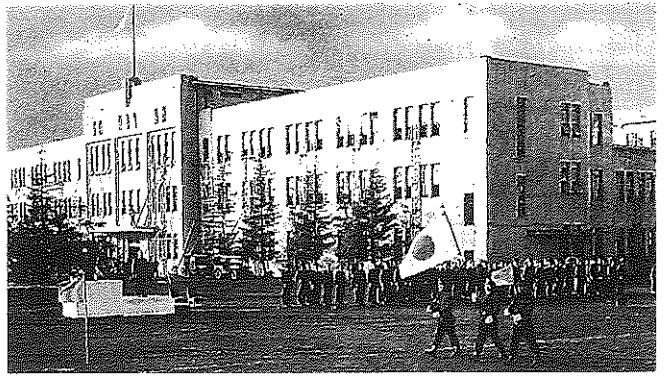
また、平作川に9mのカッターが係留され、陸上要員も久里浜湾での中隊対抗カッター競技会に加わった。

断郊競技も行われた。当時のコースは、第1回が久里浜駅〜西方の丘陵地〜尻こすり坂〜久里浜の約8km。第2回目は、久里浜〜浦賀方面〜大津丘陵〜久里浜の約10kmであった。

当時の断郊競技は、中隊で9名の分隊を8〜9組編成し（原則は全員参加）、中隊のトータルタイムで優劣を



久里浜駐屯地営庭での入校訓練



530名とされる。

保安大学の校長は、横智雄先生だった。たびたび、訓練や野営を視察されたが、その詳細は『防衛の務め』及び、1期生の田崎君が編集した『横の実』に詳しい。

「海青し…」で始まる防大の校歌はまだなかった。その歌詞も田崎君が小原台に移った3年の時に書き上げた記憶している。

また、「へ北に都を見下ろして……」の逍遙歌は、1期生の卒業後にできたものである。我々は任官して全国の部隊に配置されたが、その時に後輩の防大生の部隊実習に付き合い、彼らから教わって、いい歌だと感心した。

保安大学校ではクラブ活動も行われた。ラグビー、サッカーが盛んであり、遠洋航海で来日したスウェーデン海軍候補生との親善試合が印象に残っている。

剣道・柔道等の武道は、戦前の影響を受けて盛んだったし、腕に自信のある者が多かった。私は射撃部に入りたかったが、当時はまだ設備がなかった。

小原台に移って自前の小射場ができ、射撃部ができた。したがって保安大の時期には、特別体育活動として初心者向けの剣道を選んだ。

久里浜・保安大での日常生活に、不便を感じることはなかった。学生舎地区の食堂脇には売店があり、「おぼちゃ

ん」の愛称で親しまれた熊本さんが、洋品雑貨の店を出しておられ、学生の要望に添えてくれた。学生だから本が必要だったが、久里浜では平坂書房はまだ売店に出店してなかった。

### ●小原台の工事と移動準備

入校した時から、保安庁が大学の用地選定を進めていることは聞いていた。小原台が選ばれた経緯は『自衛隊十年史』に詳しいので、そちらに譲る。

ただ、久里浜に近い武山への移転が有力視されていたと記憶している。しかし当時、そこには米海兵隊が駐留しており、相模湾からの揚陸場と軽飛行場が近くに在ることから、米国側が手放さなかつたようだ。結局、「東京に近い」との理由から、小原台に決まったと聞いていた。

一方、政治の面では、防衛庁の成立により「保安隊」から「自衛隊」へと変化した。これは単なる名称の変更ではなかった。すなわち、警察的組織の延長から国防組織への変換であり、学校側は、学生の動揺や心情の変化を非常に気にしていた。

29年の自衛隊法成立に伴い、学生に対して指導教官から、「将来の進路についてご家族と相談したい者は、そのための休暇を与えるので、申し出るように」との話があった。

しかし、学校側の心配は杞憂に終わり、退学を申し出る者はいなかったと聞いている。と同時に、小原台への移転・引越しの準備が本格化した。

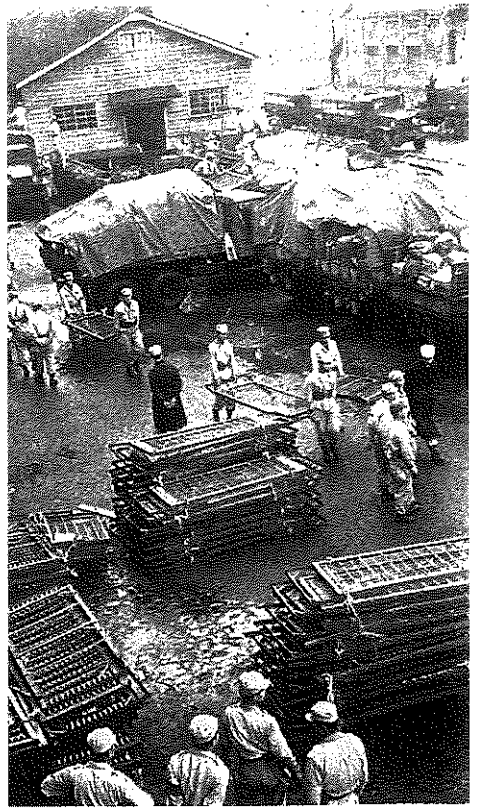
### ●小原台への引越し

昭和30年春、保安大の1期・2期生約800名の学生と、学校職員が、春休みを返上し、小原台の新校地への大移動作戦を実施した。

小原台上に鉄筋の隊舎がそびえ立っていた感激は忘れられない。同一起居100名という大部屋から8人の小部屋、自習室も独立しており、当時の住宅事情からすれば破格の扱いで、大いに感激したものだ。

だが、小原台上での当初の生活は悲惨だった。周辺整備の施工が遅れ、春の風による埃が舞い上がり、雨が降るとぬかるみになった。新しい学生舎の靴箱の上には私物の長靴が並び、起床後に携帯シャベルで舎前の側溝づくりにあたる状況だった。植樹などはまだまた先の話。とにかく、砂埃とぬかるみ対策に追われる日々が始まった。

その一方で、3期生を小原台に迎えたが、学校の名称も自衛隊法に基づく「防衛大学校」に変更され、その初めのもっとも、当時の我々は「学生」の身分であり、入校時の宣誓では「政治



### 3 保安大学のメモリアル

「防大1期生」と称される我々が、80歳を過ぎたのは今から5〜6年前。

当時の同期生会で、「我々が入学した久里浜駐屯地に保安大のメモリアルを残してはどうか」と云う話が持ち上がった。

昭和30年に小原台に移転した際、

我々はお世話になった久里浜の校舎を丁寧に清掃し、感謝を込めて駐屯地司令に引き渡した。それ以来、久里浜駐屯地を訪れる機会も少なく、現在は保安大を偲ぶメモリアルは何も残っていない。

久里浜時代を体験したのは1・2期生だけであり、2期生は独自にその碑を小原台（本館近く）に設けていた。そこで1期生会が、「保安大のメモ

リアルを久里浜の地に建立したい」との要望を、防大同窓会に持ち込んだ。久里浜駐屯地との折衝もあり、1期生会独自では将来の維持・管理は難しいと判断したためである。資金面で、1期生会ができる限り支援すると約束した。

その結果、防大同窓会の事業として、久里浜駐屯地の平作川沿いにある記念碑ゾーンに「保安大学校開校の地」の碑を、平成31年3月に建立することが決まった。

記念碑は、他の記念碑とのバランスもあり、別添の図面のようになるだろう。現在、彫り込む文字等について調整が進められている。

記念碑の建立行事は、来年3月に予定されている。

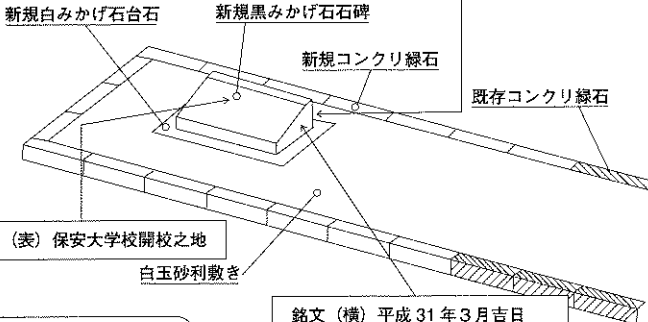
1期生の青春の1ページ、わずか2年間の「我が母校」の碑が久里浜の地に残されることになった。関係者のご協力に深く感謝するとともに、保安大

&防衛大の弥栄を祈念し、見守り続けたい……。

（5月17日 記）

### 保安大学校記念碑の完成イメージ

銘文（裏） 1953.4.1 保安大学校仮校舎、久里浜に開校  
1954.7.1 防衛大学校と改称  
1955.4.1 小原台校舎に移転



銘文（表） 保安大学校開校之地  
白玉砂利敷き

銘文（横） 平成31年3月吉日  
防衛大学校同窓会建立

1期生会を含める表現を5月の総会でまとめ、本部に提案

▶銘文（横）は検討中